

## 幼稚園・小学校教諭，保育者養成校の造形教育

### －造形ワークショップの経験を生かした卒業制作－

神戸女子大学 文学部 教育学科 特任教授 山成昭世



### はじめに

筆者の前任校であるびわこ学院大学教育福祉学部子ども学科では卒業研究に卒業制作，卒業演奏という芸術に関する選択肢があります。芸術分野のゼミを選択する学生は「小さいころから図工が好きであった」「文章を書くのが苦手だから」「小さいころからピアノを習っていた」「なんとなく楽しそうだから」などそれぞれの経験や興味関心によって選択しています。芸術系大学ではないので学生には美術に関する基礎知識や技能はほとんどありません。そこで，制作にこだわらず美術教育に関する実践研究や作家研究などテーマは自由にしています。制作を選んだ学生にとっては，限られた期間内でイメージを具体化し，造形していくプロセスは困難の連続ですが，完成した時の達成感は大いと感じます。本稿では，造形ワークショップの経験を経て卒業制作に至るまでの2年間の取り組みを紹介します。

### 東近江地域の地域連携活動「コトナリエ」に参加して

3回生の「総合演習」は4回生の卒業制作に向けた準備期間となります。筆者は3回生から様々な造形体験をすることは卒業制作に有効であると考え，学生には主体的に美術館見学やワークショップに参加し視野を広げることをすすめています。その一つに東近江市の地域連携活動「コトナリエ」への参加があります。

「コトナリエ」とは2005年に「湖東夏まつり」を神戸市の主催する「ルミナリエ」からヒントを得て「湖東+ルミナリエ」で「コトナリエ」と名付けられました。湖東地域のひばり公園（10万平方メー

トル)を市民ボランティアや協賛団体・商工会青年部が協力し11万球の電球で電飾した真夏のイルミネーションは地域の大イベントとなっています。「コトナリエ」の理念は Ecology (自然環境保護運動) Economy (経済) Education (教育) を3本柱とし「光」で地域をつなげ輝かせることを目指しています。この地域連携活動に筆者のゼミ学生はテーマ決めから実践まで運営に関わり、地域の小学生を対象にした教育活動「造形ワークショップ」を担当しています。「光」という一要素を加えた未知な造形表現を子どもに向けて実践することは卒業制作を考える良い機会となりました。

### 【2018年に実施した造形ワークショップ テーマ：魚のおふろ屋さん】

学生たちは「小学校・図画工作」の授業で制作した「光る魚」をヒントに、2枚のクリアシートに魚を油性マジックで描き、ペットボトルにホットボンドで貼る作品制作を考えました。実施日は2018年6月30日・7月1日 参加者数は幼児10名 小学生48名 保護者30名 高齢者8名でした。展示期間が約2週間と長いため、天候を考慮して農業用のビニールハウス(5m×8m×2.5m)を展示空間にしました。ビニールハウス内の空間を水中に見立てて作った魚を吊るし浮遊感をだしましたが、電球そのままでは光が強すぎたため、和紙で包むことによって「光」を和らげ水中の浮遊感や湿度感を醸し出す効果



写真1 2018年 夜間風景



写真2 3歳児作品



写真3 小学校低学年作品

を得ることができました。

### 【2019年に実施した造形ワークショップ テーマ：ジャングルパニック】

2018年ワークショップでの和紙を通した光の「柔らかさ」「暖かさ」に着目し、2019年ワークショップでは和紙を用いて造花を制作しました。学生はジャングルの不気味な雰囲気を出すために竹ひごと和紙を使い巨大な造形物で空間を構成することになりました。実施日は2019年6月29日・30日 参加者数は幼児7名 小学生55名 保護者25名 高齢者8名でした。昨年と同様に農業用ビニ



写真4 2019年ワークショップ風景

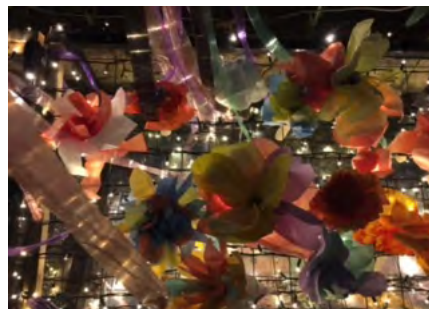


写真5 鏡面シートを使って

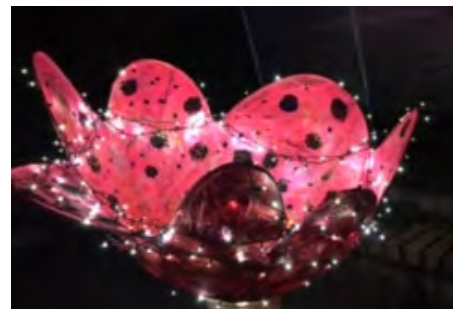


写真6 竹ひごと和紙で作ったジャングルの花

ールハウス内に展示し、造花の色彩を引き立てるために展示は鏡面反射シートを部分的に使用することになりました。

## 造形ワークショップから得られたもの

ワークショップ実施後の学生アンケートによると「その場の空間、気持ち、意図を感じることができ多様なものの見方や感じ方を仲間と共有できた」「作品を鑑賞する新たな視点を理解できた。教育や保育の現場で活かしたい」「光が灯ってワクワクする気持ちを子どもと共感し、このような造形方法もあるのだと思った」等でした。また造形ワークショップに参加した子どもからは「ぼわぼわ浮いた感じ」「ジャングルは少し怖かったが、何があるかドキドキした」「光がついて自分の作品が違ったものに見えた」「おふろ屋さんのあったかい感じがした」などの反応を聞くことができ「子どもと共感するとはどのようなことが理解できた」と述べられていました。屋外展示に耐えうる材料研究や、異年齢の指導法にも課題を発見するなど、保育者・教育者としての視点からの気づきを得ることができました。また、ワークショップの実践は様々な造形表現を知る手掛かりにもなったようです。

2019年の後期では900mm×300mm×12mmの合板を使用して個人の遊具制作に取り組みました。制限ある素材を有効に使い、動く木工遊具制作は学生にとっては困難なことも多かったようですが完成後の達成感は大きかったようです。これは、立体に表す基礎や造形プロセスを学ぶよい題材であったと思います。(写真7~9)



写真7



写真8



写真9

## 4回生の卒業制作へ

卒業制作ではワークショップの体験や様々な造形活動が課題に向かうモチベーションとなっています。学生個々と十分に話し合い、制作プロセス・技法・材料等の細かい丁寧な説明と指導が重要になります。ジャンルにとらわれずに何に挑戦してもよいのですが、4回生になると子どもに関する理解も深

まり「子ども」を意識した造形について構想するほうがイメージしやすい印象があります。ともすれば、学生は絵本・エプロンシアター・指人形など具体的な子どもの遊具や教具から考えがちです。それらを否定するものではありませんが創造的な造形活動のために、既製品の模倣や再現は避け、学生が創意工夫し主体的に造形活動できるように個々の興味や関心を丁寧に聞き取り指導することを常に心に留めています。形が見えてくると学生は見通しを立て造形活動に没頭し主体的に取り組みます。教員はここまでくると一安心です。2年間に制作された卒業作品としては、「ドライポイントによる絵本」「モンテッソーリ教具からヒントを得た巨大パズル」(写真10) 「アッサンブラージュ技法の仮面」「音を感じる保育環境に設置する遊具」「近江地区の森林廃材から作った積木」「コラージュ技法による絵本」「視覚障がい児のための遊具」等が完成しました。(写真11)

2018年に「コトナリエ」造形ワークショップに参加した学生は卒業制作で和紙を通した「光」に魅せられ美濃和紙の調査、和紙手すき体験に参加、岐阜提灯の調査、「イサム ノグチ」へと研究を進め保育環境に設置する照明作品を制作しました。2年間の経験が卒業制作に活かされた作品発表になりました。(写真12)

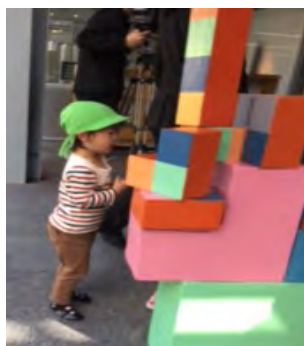


写真10



写真11



写真12

## おわりに

自分のイメージを素材や道具を使って形に表し、問題を解決していく造形活動は高度な知的活動であるということを、学生が制作に向かっている様子から感じる機会が多くあります。保育者や幼稚園・小学校教諭の養成校の造形教育は、担当教員の専門性に関わらず柔軟な対応が必要になります。「表現することの楽しさや達成感」をどのようにして学生に伝えようかと、自分の授業を振り返り検討する毎日です。造形活動によって自らが主体的に課題を見つけ問題を解決していく力を育み、造形表現を通して人と共感できる体験をするなど、造形教育は保育者・教育者の育成にはなくてはならない領域だと思います。造形表現の多様性、イメージを具体化する技法、保育や教育現場で活かせる教育法などを検討し、今後の造形教育に反映させたいと考えています。

ICT 機器の操作が苦手な筆者はコロナ騒動の渦中でオンライン授業をこなしていくことで精いっぱいでした。オンライン授業では素材の手触りや道具の使い方、制作の環境、人とのコミュニケーションを通してできる学びを伝えることは、筆者の担当科目の特性を考えると限界があると感じるのが本音です。しかし、自分自身の授業録画を見返すと発信側の伝え方の不十分なところに気付くことも多く今後の対面授業の改善点に活かせるよい機会となりました。「保育内容・表現」の領域をオンラインで子どもに発信するにはどのような方法があるのかについて現在ゼミ生と zoom ミーティングで話が盛り上がっています。未来の保育者からどのようなアイデアが出てくるのか楽しみにしています。オンライン授業も授業形態の選択肢の一つと捉えて前向きに挑戦しています。

(本稿は筆者の前任校「びわこ学院大学」での実践内容をまとめたものです)